

平成26年4月30日

平成25年度 道徳教育勉強会（研究報告）

代表 府中市立府中第八中学校

校長 森岡 耕平

1 平成25年度の年間活動の概要

(1) 横山利弘先生を囲む道徳教育東京勉強会

回	月	日	曜	時 間	会 場	参加者
1	4	20	土	14:00-17:00	杉並区立阿佐ヶ谷中学校	36人
2	6	15	土	14:00-17:00	杉並区立阿佐ヶ谷中学校	26人
3	8	24	土	14:00-17:00	府中市女性センター	40人
4	10	19	土	14:00-17:00	杉並区立阿佐ヶ谷中学校	28人
5	12	21	土	14:00-17:00	杉並区立阿佐ヶ谷中学校	32人
6	2	23	土	14:00-17:00	杉並区立阿佐ヶ谷中学校	25人

○本年度は延べ187人の参加者により、年6回の定例勉強会を開催した。参加者は関東各都県を中心に近畿、東北からも参加があった。毎回、読み物資料を選定し、その中心発問づくり、授業づくりに取り組んだ。

(2) 自主勉強会

回	月	日	曜	時 間	会 場	参加者
1	5	18	土	14:00-17:00	府中市立府中第八中学校	4人
2	7	20	土	14:00-17:00	府中市立府中第八中学校	5人
3	9	28	土	14:00-17:00	府中市立府中第八中学校	4人
4	11	16	土	14:00-17:00	府中市立府中第八中学校	2人
5	1	25	土	14:00-17:00	府中市立府中第八中学校	3人
6	3	15	土	14:00-17:00	府中市立府中第八中学校	3人

○本年度は延べ21人の参加者により、年6回の自主勉強会を開催した。参加者は自らの研究授業や研修に向けて、自校の課題を出し合い、協議した。

2 研究内容について

研究主題 「読み物資料の活用—生き方を深く考える道徳の授業づくり—」

(1) 道徳の時間の指導は心を育む時間になっているか？

- ・教科の指導は知らないことを知る喜び（知の獲得）、道徳の時間は知ってることをさらに深く考える喜び（価値の自覚）によって成り立つ。年間35時間の指導はそうになっている？

- ・行動のパターンを教え込むこと、個別の行為を教えることは生活徒指導。集団の関わり方や在り方について話し合い、その結果お互いの望ましい態度や行動の原則を決めることは特別活動。情によって思いを寄せ（心情）、自分の意志によって判断し（判断力）、よりよく生きようとする（意欲・態度）を育てることが道徳。

(2) 道徳の時間の目標をおさえている？

- ・「道徳の時間においては…補充、深化、統合し、道徳的価値及びそれに基づいた人間としての生き方（自己の生き方）についての自覚を深め、 道徳的実践力を育成するものとする。」

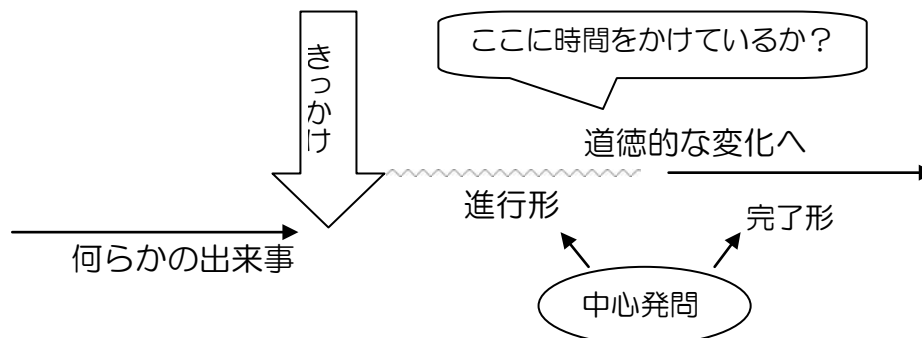
授業のやり方、方法

道徳の時間の目標

「生き方についての自覚深める」指導方法を工夫して、「道徳的実践力」を育成する。

(3) 授業の中で、生徒が生き方についての自覚を深めるために読み物資料を活用できているか？

＜道徳の時間に生き方を考える資料として、有効な資料の構図＞



☆「**誰が変化したのか**」、「**きっかけは何か**」、「**何で変化したのか**」 ←ここを考える！

資料の中で、道徳的な変化に向かう主人公が、どんな思いで、また何を考えてそうしたのかをじっくり考え。主人公の思いや考えに迫ることで、人としてよりよい在り方、生き方を見つめることができる。

(4) 読み物資料を活用して生き方を深く考える授業づくりに必要なことは？

＜授業前＞

- (1)資料を選び、じっくり読む。(1～5の後、範読を練習する)
- (2)考えさせたい場所を決める。(「誰が変化したのか」「きっかけは何か」「何で変化したのか」)
- (3)中心発問を決め、生徒の答えを予想する。(できれば複数で、学年会 15分1本勝負)
- (4)板書内容を考える。

(登場人物の関係、発問の流れについて生徒が考えを深めるための手助けとして)

- (5)ワークシートを準備する。(発問を印刷しない。中心発問への考えと感想と自己評価の欄)

<授業の導入・展開・終末>

- (1) 導入は簡潔に、すぐ資料に入る。
- (2) 資料の範読は必ず先生が！授業の流れにとって「読みの間」が大切。
- (3) 資料で追いかけるのは主人公の心の動きだけ
(あれこれ登場人物を考えると混乱のもと)
- (4) 登場人物の関係、主人公の気持ちや考えの変化について補助発問は最小限にする。
- (5) 中心発問に時間をかけ、生徒の考えを深めさせる時間を充分確保する。
 - ① 主人公の思いや考えを問う。「どうすべきだった?」「あなたならどうした?」は禁物。自分だったらと問えば、評論家的に資料から離れる。行動を問うことは生活指導に直結。
 - ② 手が上がらなければ、一人ずつ聞いていく。沈黙も「よし」とする。
 - ③ 沈黙を恐れて、グループでの話し合いを入れることがあるが、互いの気づきをつぶやき合えることには意味があるが、グループとしてまとめたり、発表させることは多様な考えをを阻止することになる。「つぶやかせて、全体で拾い合う」ことでなければ話し合い活動は学級活動における話し合い活動や集団討論になってしまう。
 - ④ 中心発問の答えに、「どうしてそう思ったの?」など、切り返して考えを深める。ここで様々な気づき合いが生まれる可能性が高い。
- (6) 1～5 ができれば、先生の経験談とか説話とか、ほとんどいらない。週末では、一言ふたこと授業の感想を先生が触れて、感想を書かせると、そこに「価値の一般化」が図られる。

※「価値の一般化」とは、資料で深めた考えから、自らの行動や生活を振り返らせ、改めさせること。小学校では授業の展開を前段と後段で分け、その後段で資料から離れ、教師の説話などから自己の振り返りを図る。しかし子どもの発達段階とともに、「価値の一般化」を意図的に図ろうとすれば、それは生活指導的なお説教と受け止められてしまう。

<授業後>

- (1) ワークシートを回収し、生徒の考えの深まりを把握する。感想欄には「いいねえ」という部分を朱書きでアンダーラインまたは短いひとことを添える。後日返却しファイル化。
- (2) 学年通信などで深く考えた生徒の意見・感想を載せ、共有する。

■事例報告 資料「二人の弟子」西野真由美（あかつき）の活用について

1 自己紹介と道德教育推進上の課題（授業づくり、新聞記事の活用、特別支援と道德）

2 横山先生による講義

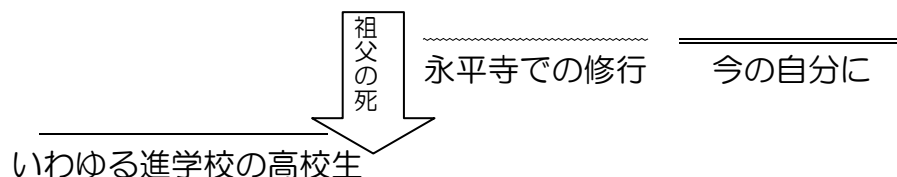
(1) 読み物資料はどんなものがよいのか

- ・ 事実に基づいて、作られた資料。道德的な課題が捉えやすく描かれた資料。
- ・ 新聞記事は、記者が意図を持って取材し作成したもの。感動的な記事だとしても道德的課題を考えるしかけがなければ資料に適さない。
- ・ 「一冊のノート」は作者の体験に基づき、祖母を思う強い心が力のある資料を生んだ。おばあちゃんと並んで草をひく主人公、「きれいになったね」と一言。そこまでの資料の展開が読むだけで映像化できるように豊かな表現がなされている。この資料はだれが取り上げても失敗しない。
- ・ 資料を読むとき、評論家のように、どうすべきだったかと読むてはいけない。それでは自覚が起こらない。自分のこととして考えさせることが大切。
- ・ 自覚に必要なのは、まず「気づく力」。そして「想像する力」。
- ・ 想像する力は、「映像より音声、音声より文字情報」から磨かれる。
- ・ 道德の読み物資料とは、映像が浮かび上がるような資料である。

(2) 道德の時間の目標を考える

「…、道德的価値及びそれに基づいた人間としての生き方についての自覚を深め、（授業の方法）道德的実践力を育成する（目標）ものとする」

- ・ 何も無いところで自覚を深めることはない。祖父の死に直面した出来事。



3 資料分析と中心発問づくり 資料「二人の弟子」

- ・ 道心と智行、それぞれの悟りが雪下のふきのとうと暗闇の中の白百合に導かれる。
- ・ 智行があふれる涙を流しながら考えたこと、そこに中心発問をどうつくるか。
- ・ 闇の中の純白の白百合の輝きから、自分自身と向き合った智行は、何を考え、涙を流したのだろうか。

→ 修行を捨て、すてばちな生き方をして再び寺に戻った道心を許せず、怒りすら覚えた自身の心の中にねたみ、嫉妬があること。今こそ道心を救うべき時であることに思いがとどいていなかった自分。これからが修行だ。上人への感謝。